

# 伊勢物語「筒井つの段」の構成

——伝承性を中心に——

森 本 茂

一

伊勢物語の第三段は、「筒井つの段」としてよく知られているところであるが、この段を分析してみると、いくつかの古伝承をふまえた説話をふくんでいて、構成的にみて成立の過程に興味のある問題を持つているようである。そこで本稿ではこういう点について、若干検討を加えてみたいと思う。

第二三段の本文は次の通りである。

(A) むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを、大人になりければ、をとこも女も恥ぢかはしてありけれど、をとこはこの女をこそ得めと思ふ。女はこのをとこをと思ひつつ、親のあはすれども、聞かでなんありける。さて、この隣のをとこのもとよりかくなん。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

伊勢物語「筒井つの段」の構成

女、返し、

くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべきなどいひ／＼て、つひに本意のごとくあひにけり。

(B) さて、年ごろ経るほどに、女、親なくたよりなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらんやはとて、かふちの国、高安の郡に、いきかよふ所出できにけり。さりけれど、このもとの女、悪しと思へるけしきもなく、出しやりければ、をとこ、こと心ありてかかるにやあらむと思ひうたがひて、前栽の中にかくれるて、かふちへいぬる顔にて見れば、この女、いとよう仮粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらんとよみけるをききて、限りなくなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。

(C) まれ／＼かの高安に来て見れば、はじめこそ心にくもつくりけれ、今はうちとけて、手づからいひがひとりて、筒子のうつ



は物に盛りけるを見て、心うがりていかずなりにけり。

(D) さりければ、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり見つつを居らん生駒山雲なかくしそ雨は降るとも

といひて見いだすに、からうじて、大和人来むといへり。よろこびて待つに、たび／＼過ぎぬれば、

君来むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞふる

といひけれど、をとこ住まずなりにけり。

この段について管見に入つたところでは、倉野憲司氏(注1)を除くと、秋山虔氏・福井貞助氏らによつて一般には三つの段に分けられて

いる。すなわち「まれ／＼かの高安に」以下終わりまでを一つの段と考えるのであるが、次に示す古今集・大和物語などの記載を参照すると、四つの段に分ける方が適當のように思われる。そこでわたくしは論の展開上、本文を右のように(A)～(D)の四つの段に区分してみた。

さて、右の説話のうちのいくつかの部分は、古今集・大和物語・古今和歌六帖にも収められている。まず古今集には右の(B)に当たる部分が次のようにある。

題しらず

よみ人しらず

先四風ふけばおきつしらなみたつた山よはにや君がひとりこゆらん

ある人、この哥はむかし大和の国なりける人の女に、ある人すみわたりけり。この女おやもなくなりて、家もわるくなり行くあひだに、この男河内のくにに人をあひしりてかよひつつ、かれやうにのみなりゆきけり。さりけれども、つらげなるけしきもみえで、かふちへいくごとに男の心のごとくにしつ、いだしやりければ、あやしと思ひて、もしなきまに、こと心もやあるとうたがひて、月のおもしろかりける夜、かふちへいくまねにて、せんさいのなかにかくれてみければ、夜ふくるまで、ことをかきならしつうちなげきて、この哥をよみてねにければ、これをききて、それより、又外へもまからずなりにけりとなんいひつたへたる。

(卷一八・雑歌下。日本古典文学大系本)

次に大和物語・一四九段には、(A)・(D)に当たる部分はなく、(B)・(C)に当たる部分は次のようである。(紙面の関係から全文は引用できない)(B)の部分の冒頭は、

昔大和の国葛城の郡にすむ男女ありけり。この女かほ容貌いときよらなり。としごろおもひかはしてすむに、この女いとわろくなりければ、思ひわづらひて、かぎりなくおもひながら妻をまうけてけり。このいまのめは富みたる女になむありけるとあり、男が前栽のかげから見ていると、女は、

端にいであて、月のいとみじうおもしろきに、頭かい梳りなどしてをり。夜更くるまで寝ず、いといたううちなげきてな



がめければ、人待つなめりとみるに、使ふ人のまへなりけるに  
いひける、

こうして「風吹けば」の歌をよむ。さらに見ていると、女は、

この女うち泣きて臥して、金<sup>かなま</sup>腕に水をいれて胸になむ据ゑたりける。「あやし、いかにするにかあらむ」とてなほみる。さればこの水熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。又水を入れる。

という様子である。(C)に当たる部分は、

かくて月日おほく経ておもひけるやう、「つれなき顔なれど、女のおもふことといひみじきことなりけるを、かく行かぬを、いかに思ふらむ」と思ひいで、ありし女のがりいきたりけり。久しく行かざりければ、つつましくてたてりけり。さてかいまめば、我にはよくてみえしかど、いとあやしき様なる衣をきて、大櫛を面櫛にさしかけてをりて、手づから飯盛りをりけり。いといみじとおもひて、来にけるままに、いかずなりにけり。この男は王なりけり。

(日本古典文学大系本)

次に古今六帖には「風吹けば」の歌が二か所あらわれる。

#### 雑風

かく山のはなのこ

風ふけば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとりゆくらむ

(巻一)

#### 山

かこの山の花子

風ふけば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとりゆくらむ

(巻二)

伊勢物語「筒井つの段」の構成

## 二

さて、右に示したように、古今集・大和物語との関係からいうと、(B)の部分がまず問題になりそうである。そこで(B)の部分から考察してみたいと思う。

(B)の説話を持つ古今集雑歌下は、雑歌上とともに古伝承の要素をふくむ歌が多いという点で注目しなければならぬのであるが、この九四の歌の左注の書かれた時期はいつか、また、古今集の歌および左注と伊勢物語との先後関係など、多くの困難な問題をはらんでいる。

九四「風ふけば」の歌の左注の成立事情については、「後人の添加。伊勢物語はこれを受けて作られた。」(校正古今和歌集講義)、「紀氏の筆に成る。伊勢物語はこれを受けて作られた。」(古今和歌集正義)、「伊勢物語からの転写」(金子元臣氏・古今和歌集評釈)、「古今成立以後二百年以内に後人の添加」(安田喜代門氏・古今集時代の研究)などの説があり、大和物語を加えた三者の関連については、「当代の口碑をもとに成立した」(松尾聡氏・フテネ文庫「伊勢物語」)、「三者三様に他資料・仏承に拠つた」(秋山虔氏・「文学」昭和三十一年一月号、福井貞助氏・伊勢物語生成考)などの説がある。

いつたいに古今集九四の左注と伊勢物語(B)の部分の部分を比較してみると、左注には「月のおもしろかりける夜、……夜ふくるまで、ことをかきならしつうちなげきて」とある点が、伊勢物語と大きく異なるところであるが、後にも触れるように、「風ふけ



ば」の歌は旅にある夫の身を案ずる歌であり、そこに主題があると思われるから、説話の内容としては伊勢物語の方がより素材であり、古い形を残しているようである。しかし、九箇の左注に「ある人、この哥はむかし……となんいひつたへたる」とある点からみると、古今集のはある人の語つた伝承説話であることが明らかであり、そのことから推測すると、「風吹けば」の説話は、時代によつてまた大和の土地によつて、多少形や趣の変つたものが伝承流布していたのであらうと考えられる。

ところが大和物語になると、伊勢物語・古今集とは大いに趣が變つてゐる。たとえば、男女は「大和の国葛城の郡」に住むと限定し、女を「かほ容貌いときよらなり」と説明し、新しい女を「富みたる女」だとし、もとの女の心情を「心ちにはかぎりなく妬く心憂しとおもふを忍ぶるになむありける。留まりなむと思ふ夜も、なほ『往ね』といひければ……」というように、説話としてのおもしろさを盛上げ、夫を思う気持を「金碗に水をいれて胸になむ据ゑたりける。……さればこの水熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。又水を入れる。」というように、滑稽なまでに強調している。こういう点からすると、大和物語のは説話として戯化されてしまい、くずれた形のものであり、説話としてのおもしろさを意識的に強調しようとする傾向がみられ、多分に説明的である。

したがつて「風吹けば」の説話に関する限りでは、大和物語のような形で大和地方に流布していたというよりも、大和物語の作者が読者（聞き手）を予想して筆を加えたのではあるまいかと考

えられる。

ところで、「風吹けば」の説話のように、愛妻があるのに新しい女ができ、その女に愛情を傾けていた男が、もとの妻の詠んだただ一首の歌に感動し、新しい女を捨ててもとの妻のもとに帰るという話は他にもある。大和物語の一五七段は下野国を背景にした話であり、その同じ話が今昔物語・卷三〇の第一〇話にもある。また次の一五八段は大和国を背景にしており、その同じ話が今昔物語・卷三〇の第二二話では丹波国の話になつてゐる。このように「風吹けば」説話には類型があり、とくに後者のように、大和物語で大和国の話が今昔物語では丹波国の話になつてゐることなどからすると、同型説話が流布することの一端をしのばせている。すると「風吹けば」の説話は、地方／＼を通じて共通の地盤を持つものであり、その一つとして大和地方で古くから伝承・流布していたものであつたろうことを強く感じさせるのである。

## 二

次に(9)の部分であるが、この部分の描写も伊勢物語の方は簡潔であるが、大和物語の方は詳細である。すなわち、伊勢物語の「まれまれの高安に来て見れば」に対して、大和物語は「かくて月日おほく経ておもひけるやう、『つれなき顔なれど、女のおもふことといひみじきことなりけるを、かく行かぬを、いかに思ふらむ』と思ひいでて、ありし女のがりがいきたりけり。」とあり、男が高安に出かける動機が詳しい。このことは次に続く部分も同



様であり、大和物語では「久しく行かざりければ、つつましくてたてりけり。」と男を描き、次に「さていかいまめば、我にはよくみえしかど、いとあやしき様な衣をきて、大櫛を面櫛にさしかけてをりて、手づから飯盛りをりけり。」と女の様態が詳しい。

この両者のちがいは、「風吹けば」説話のときと同じく、大和物語の方は説話としてのおもしろさを意識的に高めようとする創作的態度がみられ、伊勢物語のよりよくずれた形をとっている。大和物語の作者が意識して筆を加えた趣が感じられる。結びの「この男は王なりけり。」に至つても大いに説明的である。

#### 四

次に(四)の部分であるが、これは大和物語にはない。まず「君があたり」の歌は万葉集の「三三三君があたり見つつもをらむ生駒山雲なたなびき雨はふるとも」(巻二・よみ人しらす)の改作か異伝であろう。万葉の歌は「寄物陳思」の部に入っている。「寄物陳思」は巻一〇にもみえるが、そこでは「相聞」を四季に分け、その中に「鳥に寄する二首」とか「花に寄する九首」のように題の物が明示してある。これに対して巻一二の方は、題の物は明示されないで、ただ歌が並んでいるにすぎない。しかしよくみると、三三三思ひ出でて術なき時は天雲の奥処も知らず恋ひつつぞをる三三三天雲のたゆたひやすき心あらば吾をなたのめ待たば苦しも三三三君があたり見つつもをらむ生駒山雲なたなびき雨はふるとも

三三三なかなかいかに知りけむわが山に焼ゆる火氣の外に見ま  
しを

三三三吾妹子に恋ひ術なかり胸を熱み朝戸あくれば見ゆる霧かも  
三三三あかときの朝霧ごもり反らはいかにか恋の色に出でにけ  
る

三三三思ひ出づる時は術なみ佐保山に立つ雨霧の消ぬべくおもほ  
ゆ  
(新訓万葉集。以下同じ)

のように、三三三三三三三が「雲に寄する歌」、三三三三三三三が「煙に寄する歌」、三三三三三三三が「霧に寄する歌」となっている。すると三三三三の歌は、雲に寄せて相聞の情を叙べた歌である。これに類した歌には次のようなものがある。

三三三末通女らがはなりの髪を木綿の山雲なたなびき家のあたり  
見む  
(巻七・雑歌)

#### 山に寄する

三三三秋されば雁飛び越ゆる立田山立ちても居ても君をしぞ思ふ  
三三三春日山雲あがくりて遠けども家は思はず君をしぞ思ふ  
(巻二・正述心緒)

「秋されば」の歌は「立田山」までが序であるが、序は実際の景ともみられ、「君があたり」の歌と同様に、大和の女が立田山を見て君をしのぶというものであり、「末通女らが」「春日山」の両歌も、それぞれの山を見て君をしのぶよすがとしている。これらの山はみな君のいる方にそびえている山で、君をしのぶになつ



かしい山である。したがつて「雲なたなびき」と、雲に寄せて願わずにはいられないのである。この歌の生命はここににある。すると「君があたり」の歌は、大和に住むある一人の女性の体験とか述懐とかいうようなものではなく、何かの事情で去つた男をしのぶという、同じ境遇にある大和女の心情を歌つたもので、広く各地方に通ずる基盤を持ち、民謡性・伝承性の感じられるものである。

次に「君こむと」の歌であるが、この歌の類歌らしいものは見当らない。ただ、いついつに行こうと約束した人がやつてこない嘆きを詠んだ歌は、万葉集にいくつも見出される。

三天よし系やし来まさぬ君を何せむに厭はず吾は恋ひつつをらむ  
(卷一一・寄物陳思)

三三石根踏み隔れる山はあらねどもあはぬ日まねみ恋ひわたるかも  
(卷一一・寄物陳思)

三三夕されば床のへ去らぬ黄楊枕いつしかと汝王を待てば苦しも  
(卷一一・寄物陳思)

三六吾背子を今か今かと待ちをるに夜のふけぬれば嘆きつるかも  
(卷一二・正述心緒)

三六吾背子が来むと語りし夜は過ぎぬし系やさらさらしこり来めやも  
(卷一二・正述心緒)

三〇云君は来ず吾は故無み立つ波のしくしくわびしかくて来じとや  
(卷一二・寄物陳思)

いることがわかる。しかしながら、民謡というものは、その地の人がその地の範囲内で共通の感情を歌に托して詠むものであつて、その意識の中には国讃めという心持もふくみ持つのが自然の成行きであると思う。すると民謡の中におのずから地名とかその地独特のものを詠みこむ場合が多くなつてくる。(注5)これは現今の民謡をみてわかることである。こういう点からいうと、この歌が民謡的である地方で歌いつづけられてきたとは考えられないと思う。

## 五

さて次に、伊勢物語の(A)の部分も、大和物語にはみえない部分である。(A)の部分は「筒井つの」「くらべこし」の贈答歌を中心にしてゐる。まず「筒井つの」の歌についてみると、この歌の類歌らしいものも見当たらないし、「筒井」「井筒」という語も伊勢物語以前の作品にあらわれないようである。以後の作品には「筒井筒井筒のうへに水こえてむすぶも浅し五月雨のころ」(新千載集・卷三・土御門内大臣)、「はかなしや筒井の蛙わればかりほかも知らず浅き心は」(夫木抄・卷五・藤原為顯)、「筒井づつ井筒のたるひとけぬまに早くもくる冬のかげかな」(夫木抄・卷一六・定家)などとあらわれるが、時代が大分ずれてゐる。

古代の生活では、泉であつても川であつても、用水として汲むところを「井」といつていたらしく、井とは水の集まるところの意味だと「万葉集抄」にもみえてゐる。逸文丹後風土記に「丹後の国丹波の郡。郡家の西北の隅の方に比治の里あり。此の里の比



治山の頂に井あり。其の名を真奈井と云ふ。今は既に沼と成れり。」(奈具社)とある「井」も泉のことであろう。柳田国男氏監修の「民俗学辞典」によると、現今でも信州の遠山地方では、井戸は堰水のこと、堅に掘り下げた井戸はなく、家の前の溝川の洗い場を「井戸ばた」といい、鳥取県の各郡でも「井戸場」とは川べりの物洗い場をいうそうである。また、日本海沿岸のかなり広い地域にかけて、井戸のことを池と呼ぶそうである。ところが自然の水だけではたりなくなると、地盤を掘り下げて地下水を汲み上げるようになり、筒井ができるのであるが、柳田氏によると堅に深く掘り下げる技術は江戸時代に入つて普及したということである。しかし、正倉院文書・拾芥抄・和漢三歳図会に、井を掘るのに吉日を選ぶことを示し、「乙丑・辛未・己丑……」のように具体的に日が掲げてある点からみると、すでに奈良時代に所によつては井戸を掘つたと考えてよいであろう。

しかしそれにしても「筒井」「井筒」の語は伊勢物語に初めてみえる語である。筒井の上に置いた井筒の高さと子供の背丈とくらべるということは、井筒という物さえあれば、日常の体験としてごく自然に行われることであらうし、子供が成長することの喜びにも連なつたはずである。

こういうわけで、「筒井つ」の歌の背景は今少し明らかにしたいのであるが、この歌はある地方の特異性を持つてゐることはないし、大和物語に(A)の部分がないということも傍証にすると、この歌が古い伝承歌であつたろうとは考えがたいように思う。

#### 伊勢物語「筒井つ」の段」の構成

次に「くらべこし」の歌であるが、当時の女は適令期を迎える、振分髪を結んで髪上げということをした。このことは、竹取物語にも、「このちご養ふほどにすくすくと大きになりまさる。三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ裳着す。」とあるし、万葉集にも次のようにみえてゐる。

三方沙弥、園臣生羽の女に娶ひて、いまだ幾時も経ず、病に臥して作れる歌三首(内一首)

二三たけはぬれたかねば長き妹が髪このころ見ぬに挿入れつらむか  
(巻二・相聞)

三回末通女らがはなりの髪を木綿の山雲なたなびき家のあたり見む  
(巻七・雑歌)

三三橘の寺の長屋にわが率寝し童女放髪は髪あげつらむか

右の歌は、椎野連長年が詠て曰はく、それ寺家の屋は俗人の寝処にあらず。また若冠の女を偲ひて放髪叩といへり。然らば腰句にすでに放髪叩といへれば、尾句に重ねて冠を著くる辞を云ふべからざらむか。決めて曰く、

三三橘の光れる長屋にわが率寝し童女放髪に髪上げつらむか

(巻一六・有由縁井雑歌)

「くらべこし」の歌は、こういう伝統的な髪上げの行事をふまえてゐることは明らかである。(注6) 高田与清は「松屋筆記」の「振分髪」(二三)の項で、「くらべこし……」の歌は万葉集の「三〇元年の八歳を切り髪を吾同子を過ぎ橘の末枝を過ぎてこ



の川の 下にも長く 汝が情待て」(卷一三・柿本朝臣人麿の集の歌)という長歌に拠るとしているが、この長歌も発想は類似しているが、本歌と考えるにはむりであろう。「君こむと」の歌がそうであったように、「くらべこし」の歌もある地方の特殊性を詠んでいるのではないから、この歌がある地方の伝承歌であつたらしいとは考えがたい。

## 六

以上、第二三段を分析してみたのであるが、けつきよく、(B)の「風吹けば」説話に(C)の高官の女説話の添つたものが中心になり、古今集・大和物語を参照すると、(B)・(C)説話は大和地方で土地によつて多少説話の内容も変つて伝承されていたと考えられる。その中でも、伊勢物語の説話がもつとも素朴であるから、もつとも古態を伝えているのではなからうかと感じられる。それでは、(A)・(D)の部分が(B)・(C)の説話に付加されたのはいつのことであつたろうか。一般には、原伊勢物語作者が当初に二三段全部を作つたと考えられているが、わたくしは次のように推定したい。

前述したように大和物語・一四九段は、内容はくずれてはいるが、伊勢物語の(B)・(C)の部分だけを持ち、文末は「この男は王なりけり。」と結んである。この文末について、岡一男氏は、『大和物語』には此の話を葛城郡の男女のこととして載せて、終りを『この男は王なりけり。』を以て結んだのは、業平を暗示しているようだが、彼は葛城郡に縁故がなかったやうだから、此の事は

『大和物語』の作者が『伊勢物語』の話を全部業平のことらしく考へて、おぼめかしたのであらうと推定される。」(古典と作家)と述べておられる。業平は桓武天皇の曾孫、平城天皇の孫であり、たしかに「王」であるから、「この男は王なりけり」は岡氏のいわれるように、伊勢物語の「男」を業平らしく考えた結果によるのであらうと思う。

大和物語の素材は多方面にわたっているのであるが、一四九段に關してのみいうと、もし大和国の伝説・説話だけから取つたとするならば、「この男は王なりけり」という、改つた注記めいた一文は異質な感じを抱かせると思う。伝説・説話だけに拠つたのではなく、伊勢物語を参照したという色彩が非常に濃いと思われる。すると、大和物語の作者(原作者かどうかはわからない)の見た伊勢物語第二三段は、(B)・(C)の部分だけであつたろうと思われるといふのは、もしその時、(A)・(D)の部分も伊勢物語にあつたのなら、何らかの形で大和物語にも取入れられていたであらうと考えられるからである。

かくして、伊勢物語(A)・(D)の部分は、大和物語・一四九段の成立後に、(B)・(C)の部分の前後に、後人の手によつて付加されたのではないかと考えられる。大和物語の成立については、藤原清輔の「袋草紙」上に「朱雀院御時天曆始事歟」と記されたのを初めとして、増補説もふくめて諸説が出され、まだ定説をみない。これらの諸説の結論は、南波浩氏の「大和物語」(日本古典全書)の「解説」で整理されている。それを通覧し、南波説もふくめて



およその年代を推定すると、天暦の頃に原存形大和物語の大部分が成立し、以後伝写の際に部分的な註記・補筆が行われ、室町時代以後に付載説話を持つものが現われたと考えられる。

すると、伊勢物語の第二三段は、天暦頃までは(B)・(C)説話だけであつたが、天暦頃以後に(A)・(D)の部分が付加されたのではないかという推定ができる。(A)・(D)の部分が同時に付加されたか否かはわからない)

ともかく、伊勢物語の第二三段は、大和物語の原本成立のとき以後に(A)・(D)の部分が増補され、現存本のような形に整えられたのではなからうかと考えられるのである。

注1 倉野憲司氏「上中古文学論攷」二二二頁。

2 秋山虔氏「伊勢物語私論―民間伝承との関連についての断章―」

(文学・昭和三年一月号)

3 福井貞助氏「伊勢物語生成考」一九九頁。

4 今昔物語の話は大和物語から取り来つたとみられる向きもあるが、今昔物語はかならずしも大和物語に拠つたものではなく、早くから描かれてあつた輪廓に、それぞれ異つた色彩を施したものであると、倉野憲司氏はいわれる。(「上中古文学論攷」二二五頁～二二九頁)民謡と地名の関係について、武田祐吉氏は「地名を詠み込んだ歌は旅行人の歌に多く、土着人の歌では他と比較していう必要がある場合に限られる」(大意)(「上代国文学の研究」といわれるのに対し、児山信一氏は「民族的詩歌においては土着の人がその土地の地名を詠み入れる場合も多い」(大意)として、後世の民謡の例をあげておられる。(「国語と国文学」第二卷第六号)

5 藤本一恵氏は「くらべこし……」の上髪の後からみて、この歌は万葉の伝統にもつく平安初期庶民の風俗と考えておられる。(「女子大國文」第四〇号・勢語「たれかあぐべき」)